

幕末ロマンに溢れる長崎街道・嬉野宿

# 小さな湯宿が歴史の中心に!?



江戸時代に整備された長崎街道。小倉から長崎までの57里(228km)を25の宿場がつないでいた。佐賀県内には13宿。その中の1つが嬉野宿だ。距離にしてわずか500m、通りには30軒ほどの旅籠のほか、木賃宿、商家など約100軒が連なる小さな宿場町だった。

嬉野宿の特徴は、佐賀藩が直営する公衆温泉があったこと。嬉野宿は別名「嬉野湯宿」と呼ばれ、小さいながらも古くから湯治場として旅人や近隣の人々に親しまれてきた。嬉野温泉については、8世紀に編纂された「肥前国風土記」に「東の辺に湯ありて、能く人の病を癒す」と記述があり、約1300年も前から、その存在は知られていたようだ。

長崎街道で温泉がある宿場は珍しい。当時、1日平均約10里(40km)を歩いたという旅人たちは疲れた体をゆつくりと癒やそうと、どの宿場よりも嬉野湯宿を楽しみにしていたのではないだろうか。

そんなのんびりとした雰囲気漂う嬉野宿が一変する。それまで嬉野宿は大名や長崎の警固にあたる長崎奉行一行などが休憩するだけの宿場町に過ぎなかった。ところが、1791年牛津宿が大火に見舞われ大名や長崎奉行が宿泊する本陣が焼失すると、急遽、嬉野宿の瑞光寺が本陣に。嬉野宿は小さいながらも、重要な宿場町へと発展していった。

のほほん  
紀行

長崎街道嬉野宿

# 嬉野宿の街道筋を 歩いてみよう

## 老楠が歴史を語る 本陣・瑞光寺



嬉野宿の東西の出入り口には行き来する人を監視する木戸門が立ち、それぞれ東構口、西構口と呼ばれていました。街道筋には今もさまざまな旅館や店が立ち並んでいます。かつての西構口は現在のホテル大正屋のあたり。街道をはさんで前には大正5年創業の「あめがたや本舗」があり、あめがたやノンキーを作り続けてきました。長崎街道はシユガーロードと呼ばれ、菓子文化が伝わりました。店名にもなっている「あめがた」は水あめを煮詰めて何度も引き伸ばし、間に黒砂糖をはさんだもの。口でゆっくりと溶かせばやさしい味が広がります。滋養によいとさるあめがたで英気を養いながら、街道筋を歩いてみましょう。

まず、美肌の神様「豊玉姫神社」に立ち寄り美肌祈願。そこから程近い場所に「瑞光寺」があります。長崎警固に向かう長崎奉行の宿泊所で、約620年に創建された古いお寺です。本尊には運慶作と伝えられる薬師如来像が祀られています。同寺は1457〜1460年に現在の場所に移転しました。総門には樹齢800年の老楠が力強く立ち、3000坪の境内は緑豊かで木陰を作り、夏でも心地よい風が吹きぬけます。ひよっとすると長崎奉行も楠に寄り添い、この境内で涼んでいたかもしれません。



「瑞光寺跡」1457～1460年ごろ、境内が狭かったために現在の場所に移転したため、現在は案内板が立っているのみ



「西構口跡」ホテル大正屋付近は長崎街道嬉野宿の西の出入り口



瑞光寺の総門にある樹齢800年の大楠。どっしりと立ち歴史の移り変わりを見守ってきた



上／美肌の神様が祀られている「豊玉姫神社」



「あめがたや本舗」3代目中村与一さんとフジノさん夫妻



左／江戸時代、嬉野宿の中心にあった「豊玉姫神社跡」。藩営浴場に隣接し、温泉源があった。明治時代に現在の場所に移転

ただし、嬉野宿を治める佐賀藩の支藩・蓮池藩はそれを名譽と感じるよりも、長崎奉行の随行者約200人分の下宿の手配など手間や経済的な負担が大きく、「やめてほしい」と本藩に訴えることもあったとか。今も昔も悩みどころは変わらないようだ。

「開国を迫られ尊皇攘夷派、開国派など歴史が動き始める江戸末期になると、幕府役人や商人の長崎への出入りは頻繁になり、長崎に入る最後の宿場町としてさらに重要度は増した」と嬉野市教育委員会。うれしの茶を海外に初めて輸出した長崎の女性貿易商・大浦慶がいる。彼女は貿易を通じて世界に接し、幕府体制の不合理を感じていた日本の将来を担う志士たちに資金援助をしていたという。嬉野に縁が深い大浦慶と坂本龍馬ら幕末の志士たちは長崎から離れて、嬉野でつながっていたかもしれない。

しかし、坂本龍馬ら志士たちが嬉野宿を訪れたとしても、本名ではなく儀名を使っていたのではないか。仮にそうなら、嬉野宿の資料が残っていても坂本龍馬たちの名がこれから先も嬉野の表舞台に登場することはない。

そんな幕末の歴史とクロスさせながら、嬉野宿を散策するのも旅の楽しみなのかもしれない。龍馬の姿も通りに見えてくるような気がする。